〈3科型〉

二〇二六年度

適性検査Ⅰ

注　意

1　問題は **1** のみで、**6ページ**にわたって印刷してあります。
2　検査時間は**四十五分間**です。
3　声を出して読んではいけません。
4　答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5　答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
6　**受験番号・氏名**を問題用紙と解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

聖徳学園中学校

受験番号					

氏　名

1

次の**文章1**、**文章2**、**会話**を読んで、あとの問いに答えなさい。

（＊印のついている言葉には、本文のあとに〔**注**〕があります。）

文章1

人は傷ついたとき、求めるのは心を支えてくれるものであって、物や金ではないということを知るべきだと思う。

私も、＊結核の二年間、支えてくれたのは父の本棚の本たちだった。子供でも大人でも違いがない。

挫折とは、それを引き起こした事実というよりも、心の挫折であるからだ。心のケアには文学や芸術が欠かせない。＊松陰の言うように、絶望したときは、最も心が＊ナイーブになっていて、本の中の言葉が支えてくれるのだ。

現実の挫折を救ってくれるのは、現実ではない。いくら事業に失敗したからといって、いわゆるビジネス書や金もうけの本などいくら読んでも役に立たない。本当の原因はそこでは見つからない。

自分の心と対話するためには、自分の心の奥底に眠っているものをゆり起こさなくては何事もはじまらない。

挫折によって人は優しくなれるチャンスを得ることが出来るのだ。

挫折によって人は変われる。どう変わるか。優しくなるか、意地悪になるか、そのときの過ごし方次第。

深く身を沈めて反省することは大切だが、私が一つ忠告したいのは、そこで「諦めること」はして欲しくない。

うまくいかなかったからといって、自分に才能が無いと、自分に見切りをつけて欲しくない。そういう人はそこで終わりだ。

自分で自分を「ここまで」と見切りをつけて欲しくない。ひょっとしたら自分の才能が首をすくめているだけかもしれないのだ。「もうここまで」「これ以上無理」と考えては、自分の才能を自分でつむことになりかねない。

あなたはちょっと疲れているだけ、少し休めば、またムクムクと頭をもたげてくるものがある。

人間が生きるということは、自己表現をすることだと私は思っている。自分の好きなもの、得意なものをしっかり持って、そちらに目を向けていると、人はその方向に向かっているものだ。知らぬ間に。

決して諦めないで欲しい。自分で芽をつまぬよう、楽観的であって欲しい。＊野放図に自分を信じてやろう。いつか出来る、いつかやってみせると。それでなくとも社会環境や時代のせいで、うまくゆかぬ要素があるのだから、自分だけは自分の才能を信じてやりたい。

諦めようとして諦められるものは、自分にとってたいしたものではない。諦めようと思っても諦めきれないもの、知らぬ間にもう一度よみがえってくるものこそ、自分の表現なのだ。

私にとって「物を書く」ことは、放送局に入った時点で手を離れたようにみえたが、私は決して諦めなかった。いつかきっとそこに辿りつく……それからどの位かかったろう。キャスターを経て、＊ＪＫＡと

いう組織の長と全く違う道を歩いていても、書くことを忘れることも離れることも一度もなかった。ＮＨＫ時代の一冊目から百冊近く、しこしこと書きつづけた。大いなる道草、まわり道を経て、物を書くことへの思いは深まっていき、組織の長を辞めて一気に噴きだした。社会に出て五十年経って。そして『家族という病』がベストセラーになり、*この年になって書くことに追われている。フィクションを書くことも含めて、私は挫折を経ても諦めなかったために、ようやく本来の目的の*緒についたのだと思う。

長い人生、うまくいかず諦めそうになったこともなくはない。そういうとき、私はどうやって過ごしてきたか。

仕事とプライベート、この二つが大きく分けてあるとすると、私は仕事がうまくいかぬと一所懸命プライベートを楽しんだ。江戸からの藍木綿を集めてみたり、昔の夢だったオペラのアリアに挑戦したり、クラシックバレエを習ってみたり……。好きなことだから、はまっているうちに、仕事上の挫折をしのいで、やる気も*恢復してきた。

逆にプライベートがうまくいかぬときは、仕事を懸命にした。こんなときほど仕事をしてきてつくづくよかったと思えたことはない。

大失恋を救ったのも仕事だった。毎日仕事に追われ、感情の入りこむ余地がないように努力した。その仕事もかつての相手が属していた方面からは出来るだけ遠ざかるようにして、なんとかやり過ごすことが出来た。

今では、どこかで偶然再会しないかと考えるほどに楽しむ余裕が出来てきたのである。

（下重暁子『若者よ、猛省しなさい』集英社新書）

〔注〕

結核――病気の一種。
松陰――江戸時代末期の思想家、吉田松陰。
ナイーブ――感じやすい様子。
野放図――自由気ままな様子。
ＪＫＡ――公益事業を行う法人の一つ。
この年になって――当時の筆者は八十歳近く。
緒について――見通しがついた。
恢復――「回復」と同じ意味。

文章2

小学五年生のエリカは所属していた女子サッカーチームが解散してしまい、行き場をなくしていた。たまたま出会った同学年の男子・ツバサと練習したあとで、サッカーボールを持った大人の女性・ミサキに声をかけられ、勝ったら願いを聞いてもらうという条件で練習につきあうことになる。

ミサキさんは、自分がボールを持つと、絶対に取られなかった。

エリカがツバサにやったような、わざとボールを晒して飛び込ませるようなこともせず、単に切り返しのタイミングだけで、するっと二人の間を抜いたり、時には二人同時にかわした。シュートは正確で、九割方は*木と木の間に吸い込まれていった。

逆にエリカとツバサがボールを持っているとき、ミサキさんはきびきびと素早かった。ボールを蹴る前の動作が大きいと、すかさず詰めてきてコースを消された。だからといって焦ってしまうと、するりと体を入れられて、ボールを取られた。体が触れた瞬間には、車のタイヤのような固いゴムにぶつかったみたいだった。

何度か同じ方法でボールを奪取した後で、

「これ、ずるいかなあ。さすがに体を入れての*スクリーンとかタックルは、不公平だよな。じゃ、やめとこうか」

と自分から言って、しなくなった。背丈はエリカやツバサより少し高いだけなのに、体のつくりがまったく違うのだ。

体を入れたり、当たりの強さの差でボールを奪うのを封印しても、ミサキさんの奪取力は変わらなかった。ドリブルで行こうとするとすぐにさらわれるし、パスをしようとすると読まれてカットされる。ツバサなんて、五秒とボールをキープできなかった。

結局、途中から点数を数えられなくなり〇対十くらいになって、そろそろおしまいかな、と思った頃に、ツバサがやった。

エリカの目には、完璧に見えたミサキさんのステップをまるで無視したみたいにボールをちょんとつま先で蹴った。びっくりしてミサキさんがフリーズし、はっと気づいたらボールはエリカの足下に転がっていた。

*トラップして、気づいた。

うちは、*ストライカー。それで、*スピードスター。

もっと言うと、野に咲く花に、ライオンの心、*ダンデライオン・ハート。あきらめない心。

頭の中に思い浮かんだ瞬間には、もうとっくに体が反応していた。

ゴールへ一直線。

出だしの速さなら、誰にも負けない。

一瞬でもフリーズしたミサキさんには追いつけない！

ゴールに見立てた木と木の間に、*アウトフロントで流し込んだ。

「へぇっ！」とミサキさんが大きな声を出した。

「あんたら、やるじゃない。なめたあたしの負けだ。で、なんなんだ、お願いってのは」

ツバサがすーっと息を吸い込んで、
「コーチになってください！」と大声を出した。
思わず耳をふさぎたくなるような大声だった。
ミサキさんは、もっと大きな声で笑い始めた。
「あはは、何言い出すかと思えば――」と腹をよじる。
「あたし、まだ現役だから。小学生のコーチは無理。でもさ、小学生サッカーの指導者は、たくさんいるんじゃないのか」
「ダメなんです。すごくうまい仲間がいるんですけど、普通のコーチじゃ嫌だって、チームがバラバラになっちゃって。ぼく、今、チームがないんです」
ツバサが言うのを聞いて、エリカの中で何かがぷちんと弾けた。
あたしだって、チームがほしい！
声の限りに叫びそうになって、それでも、何も言えなかった。
きっと断られると思ったからだ。エリカはやっぱり、こういう時、臆病なのだ。
口で言うかわりに、じっと見てしまった。
「おやおや、あんたら、二人ともか。じゃあ、二人が中心になって、自分たちでチームを作ればいいんじゃないの。最近のジュニアでは、十一人がだめでも八人揃えば、公式戦に出られるだろ」
エリカはガツンと頭を殴られたみたいな衝撃を受けた。
自分たちでチームを作ればいいって……。
そっか。仲間の数さえ揃えば、サッカーはできるんだ。ツバサと一緒かどうかは別にして。チームは「仲間」だから、ただの数合わせってわけにもいかないし。
「それはそうとして。あたしの負けなんだから、できることなら、願いはきく。別のこと言ってくれればいい。怪我のせいで、しばらくリハビリのトレーニングばっかりで、ボールは蹴ってなかったんだ。近々全体練習に復帰するから、軽く体を動かしたくなってさ。つきあってくれたのは感謝してる」
ミサキさんは、そう言ってすぐに帰ってしまった。
「気が向いたら、いつでも連絡しなよ。一度、練習見に来るといいぞ」と携帯の番号まで教えてくれた後で。

（川端裕人『風のダンデライオン　銀河のワールドカップ　ガールズ』集英社文庫）

〔注〕 木と木の間――木と木の間をゴールと見立てている。
スクリーン――ボールにさわらせないように、相手とボールの間に体を入れるサッカーのプレー。
トラップ――サッカーで、動いているボールを止める動作。
ストライカー――サッカーなどで、得点力のある選手。
スピードスター――足が速い人。
ダンデライオン――タンポポのこと。エリカは「恋窪ダンデライオン」というチームに所属していた。
アウトフロント――サッカーボールの蹴り方の一種。

会話

やよい――**文章1**は、挫折の本質と乗り越え方について書かれていますね。一方、**文章2**はサッカーについての物語です。どちらの文章も諦めないことについて書かれていると思います。

あきら――そうですね。**文章1**の筆者は自分の経験を挙げて、挫折を乗り越えるには**ア**のように心を支えてくれるものが必要で、挫折しても自分の**イ**を信じて諦めなければ道は開けると述べています。

さつき――**文章2**でミサキさんと大差がついたあとのエリカさんとツバサさんの反撃（はんげき）も諦めなかったからできたことですね。

あきら――ツバサさんがミサキさんに断られてもコーチになってほしいという願いをぶつけているところにも諦めない姿勢が表れていますね。

やよい――ミサキさんは現役選手なのでコーチになるのは断りますが、二人に助言をしていますね。

さつき――それを聞いてエリカさんも発想を切りかえています。

あきら――二人の諦めない心が切り開く未来を知りたいですね。私も挫折しても諦めない心をもちたいと思います。

〔問題1〕 **あきら**さんの発言の、**ア**・**イ**に入ることばとして適当なものを、**文章1**の中からさがし、ぬき出しなさい。ただし、**ア**は五字、**イ**は二字で答えること。

〔問題2〕 **さつき**さんはエリカさんがミサキさんの助言で発想を切りかえたと言っていますが、エリカさんの気持ちはどのように変化しましたか。**文章2**の中の表現をもとにして、次の□内の**ウ**・**エ**に当てはまるように答えなさい。ただし、**ウ**は五字程度、**エ**は十字程度で答えること。

> ミサキさんに**ウ**に臆病になり、素直な気持ちを口に出せずにいたが、**エ**という方法があると気づかされて、目からうろこが落ちる思いがした。

〔問題3〕 **あきら**さんは「挫折しても諦めない心をもちたい」と言っていますが、あなたは挫折した経験がありますか。それをどのように乗り越えましたか。挫折した経験がない場合は挫折した場合にどのように対処しようと思いますか。あなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、下の条件と〔**きまり**〕にしたがうこと。

条件

① **文章1**・**文章2**・**会話**の内容をふまえて書くこと。

② 「経験」は一つにしぼって書くこと。

③ 適切に段落(だんらく)分けをして書くこと。

〔**きまり**〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落(だんらく)の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますに書きます（ますの下に書いてもかまいません）。

○。と」が続く場合には、同じますに書いてもかまいません。この場合、。」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますは、字数として数えます。

○最後の段落の残りのますは、字数として数えません。

解答用紙

適性検査Ⅰ

氏　名

受　験　番　号

得　　点
※

※のらんには何も記入しないこと。

〔問題１〕挫折を乗り越えるには［ア］のように心を支えてくれるものが必要で、挫折しても自分の［イ］を信じて諦めなければ道は開ける

〔問題２〕ミサキさんに［ウ］に臆病になり、素直な気持ちを口に出せずにいたが、［エ］という方法があると気づかされて、目からうろこが落ちる思いがした。

〔問題３〕

440　400　300　200　100　20

〈３科型〉